

看護短期大学生の性格特性に関する基礎的研究（第5報）

— 矢田部ギルフォード性格検査による6年間の比較 —

大江 基¹⁾ 加城貴美子¹⁾ 美田 誠二¹⁾ 新井 健之¹⁾

要 旨

1995年の開学以来、看護学生の集団特性、自己意識などを継続的に調査してきたが、本研究は第4報に引き続き、対象を1996年度入学生と1997年度入学生に拡げて入学時と卒業時に行った矢田部ギルフォード性格検査（YGテスト）によって自己意識の変化を検討した。合わせて1995年度から2000年度までの6年間に渡り1年次に実施したYGテストによって入学年度別の集団特性を比較した。結果は以下のとおりである。

- 1 YGテストの12特性で入学時と卒業時を比較してみると、1996年度生については卒業時の方が気分変化が大きくなった反面、協調性が高くなり、攻撃性、活動性、のんきさが低くなっていた。1997年度生については、抑うつ性、気分変化、劣等感、神経質、攻撃性が低下し、客観性や、協調性が増加した。
- 2 YGテストの6集合因子で見ると、1996年度生は、活動性、衝動性が低下した反面、適応性と内省性が増加した。1997年度生は活動性が低下し、情緒安定性と適応性が増加した。
- 3 YGテストプロフィールの5類型で見ると、1996年度生については有意差が見られなかったが、1997年度生は有意差があり、卒業時にはA型、E型が低下し、逆にD型とC型が増加した。
- 4 YGテストの12特性によって、1995年度生から2000年度生まで入学時の年度別集団特性を比較した結果、入学年度によって集団特性に若干差が見られた。

キーワード：YG性格検査、集団特性、自己意識、自己成長

I はじめに

これまで、看護学生の性格特性、自尊感情などの自己意識を継続的に調査してきたが、第4報においては、1995年度入学の第一期生について、入学時と卒業時で性格特性にどのような変化が見られるか、矢田部ギルフォード性格検査（以下YGテストと略す）及びその他の検査によって比較検討を行った。その結果いくつかの知見が得られたので、1996年度及び1997年度入学の第二期生、三期生についても同様の結果が得られるか、追試を行う。また教育の現場において、入学年度によって学生の集団特性に違いがあること、年々学生の質に変化が見られることなどが話題になることがある。そこで、これまで継続的に入学時に行ってきたYGテストを用いて、1995年度から2000年度までの6年間に渡り各年度の1年次生の集団特性を比較検討する。

II 研究方法

1. 対象：入学時の調査に同意の得られた1995年度生76名、1996年度生77名、1997年度生67名、1998年度生61名、1999年度生61名、2000年度生65名。入学時と卒業時との比較については、卒業時の調査に同意の得られた1995年度生46名、1996年度生60名、1997年度生52名。
2. 内容：矢田部ギルフォード性格検査。
3. 方法：集合調査。
4. 調査時期：入学時調査は1995年～2000年まで7月上旬。卒業時調査は1998年～2000年まで3月上旬。
5. 分析方法：各年度別の集計を行い、各年度間でt検定及び χ^2 検定を行った。統計処理は、汎用統計パッケージSPSSを用いた。

III 結 果

1. YGテスト12特性による比較

1) 川崎市立看護短期大学

1996年度生及び1997年度生の1年次と卒業時のYGテスト12特性の平均値及び標準偏差値はTable 1に示すとおりである。Figure 1は1年次と卒業時の平均点の各々のプロフィールを示している。Figure 1から1年次と卒業時のプロフィールは全体としてほぼ平行関係にあるが、1996年度生、1997年度生共に全体的に卒業時の方が下回っている。

次に、同一学生の1年次と卒業時の性格特性を比較するために、12特性ごとに対応のある平均値の差

の検定を行った結果、Table 1に示すとおり1996年度生では、C（気分変化）、Co（協調性）、Ag（攻撃性）、G（活動性）、R（のんきさ）の5特性で有意差が見られた。また1997年度生ではD（抑うつ性）、C（気分変化）、I（劣等感）、N（神経質）、O（客観性）、Co（協調性）、Ag（攻撃性）の7特性で有意差が見られた。

2. YGテスト6因子による比較

Table 1 1年次卒業時YG12特性平均値の比較（1996年度生・1997年度生）

		1996年度生 (n = 60)		t検定	1997年度生 (n = 52)		t検定
		1年次 M ± SD	卒業時 M ± SD		1年次 M ± SD	卒業時 M ± SD	
D	高得点 -- 低得点 抑うつ性大 -- 小	11.12 ± 6.20	11.08 ± 6.15		10.79 ± 5.21	8.85 ± 5.92	***
C	気分変化大 -- 小	10.60 ± 4.66	11.57 ± 5.20	*	11.35 ± 4.42	9.62 ± 5.50	***
I	劣等感強 -- 弱	11.22 ± 5.10	10.47 ± 5.88		10.33 ± 4.50	8.87 ± 4.87	**
N	神経質強 -- 弱	10.18 ± 4.98	10.17 ± 5.62		9.81 ± 4.36	8.56 ± 4.70	*
O	主観的 -- 客観的	10.25 ± 3.39	9.77 ± 4.82		9.98 ± 3.38	8.48 ± 4.18	***
Co	非協調的 -- 協調的	7.62 ± 4.09	6.12 ± 4.34	**	6.92 ± 3.38	4.35 ± 3.04	***
Ag	攻撃性強 -- 弱	10.08 ± 4.27	9.08 ± 4.44	*	10.33 ± 4.20	8.40 ± 3.76	***
G	活動性高 -- 低	11.10 ± 4.32	10.02 ± 4.23	*	10.85 ± 3.36	11.21 ± 3.90	
R	のんき -- のんきでない	13.30 ± 4.56	12.15 ± 4.51	*	12.96 ± 4.02	12.35 ± 4.38	
T	内省性低 -- 高	10.45 ± 4.36	9.62 ± 4.97		8.96 ± 3.50	9.88 ± 4.31	
A	支配的 -- 服従的	9.65 ± 5.15	9.00 ± 4.99		10.42 ± 4.53	10.62 ± 4.30	
S	社会的外向 -- 内向	12.72 ± 5.08	12.90 ± 4.42		13.46 ± 4.17	14.29 ± 3.67	

* p < 0.05 ** p < 0.01 *** p < 0.001

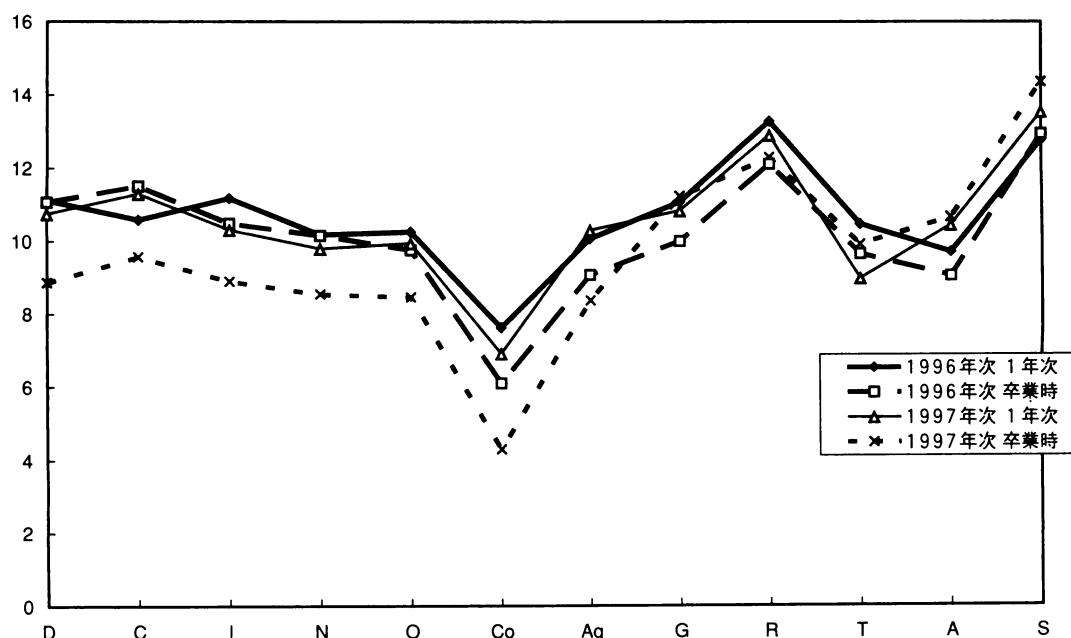


Figure 1 1年次卒業時12特性比較

次に、YGテストの12特性のうち関連した特性を上位概念でまとめた6個の集合因子によって1年次と卒業時を比較した。その結果、Table 2に示すとおり、1996年度生については社会的適応性、活動性、衝動性、内省性においていずれも1%水準で、また1997年度生については情緒安定性と適応性について0.1%水準、活動性に関しては5%水準で、1年次と卒業時の6因子の平均値の間に有意差が見られた。

3. YGプロフィール5類型について

YGプロフィールの型を典型、準型、亜型の15タイプに分類し、さらにそれらをA型、B型、C型、D型、E型の5類型にまとめた。1年次及び卒業時の各類型の度数分布は、Table 3及びFigure 2に示すとおりである。1996年度生に関してはFigure 2のグラフから卒業時の方が1年次よりもE型が減少し、C型が増えている状況が伺えるが、 χ^2 検定を行った結果有意な差は見られなかった。しかし1997年度生については1年次と卒業時の間に0.1%水準で有意差が見られた。

4. YGテスト12特性による入学年度別の集団特性の比較

1995年度から2000年度までの1年次生のYGテスト12特性の平均値および標準偏差値はTable 4及びFigure 3に示すとおりである。Figure 3から、各学年とも全体的にはほぼ類似した傾向にあることが伺われる。特にCo（協調性）、Ag（攻撃性）、T（内省性）、S（社会的外向性）は平均値の類似性が高いが、学年によって、ばらつきのある特性も見られた。各12特性について2学年ずつ組み合わせ平均値の差の検定を行った結果、Table 4に示すとおりD（抑うつ性）に関して、1998年度生と2000年度生との間で、またC（気分変化）に関して1999年度生と2000年度生の間でそれぞれ5%水準で有意差が見られた。I（劣等感）に関しては、1996年度生と1998年度生および1999年度生との間にいずれも5%水準で有意差が見られた。O（客観性）に関しては、1995年度生と2000年度入学生の間に1%水準で有意差が、また1998年度生と2000年度生との間に5%水準で有意差が見られた。

Table 2 1年次卒業時YG 6 因子平均値の比較（1996年度生・1997年度生）

		1996年度生 (n = 60)		t 検定	1997年度生 (n = 52)		t 検定
		1 年次 M ± SD	卒業時 M ± SD		1 年次 M ± SD	卒業時 M ± SD	
高得点 -- 低得点							
情緒安定性	小 -- 大	43.12 ± 16.61	43.28 ± 19.83		42.27 ± 13.69	35.88 ± 16.77	***
適 応 性	小 -- 大	27.93 ± 8.59	24.97 ± 10.90	**	27.23 ± 7.33	21.23 ± 8.21	***
活 動 性	大 -- 小	21.18 ± 6.99	19.10 ± 6.89	**	21.17 ± 6.15	19.62 ± 5.93	*
衝 動 性	大 -- 小	24.40 ± 7.45	22.17 ± 6.65	**	23.81 ± 6.23	23.56 ± 6.52	
内 省 性	小 -- 大	23.75 ± 6.63	21.77 ± 6.94	**	21.92 ± 5.52	22.23 ± 6.05	
主 導 性	大 -- 小	22.37 ± 9.56	21.90 ± 8.70		23.88 ± 7.93	24.90 ± 7.20	

* p < 0.05 ** p < 0.01 *** p < 0.001

Table 3 1年次卒業時YG 5 類型の度数分布比較

	A	B	C	D	E	χ^2 検定	人 数
1995年度 1 年次	17.4	34.8	6.5	19.6	21.7		
卒業時	15.2	17.4	10.9	32.6	23.9		46
1996年度 1 年次	21.7	30.0	6.7	21.7	20.0		
卒業時	23.3	30.0	15.0	20.0	11.7		60
1997年度 1 年次	34.6	32.7	3.8	19.2	9.6		
卒業時	19.2	26.9	19.2	32.7	1.9	***	52

*** p < 0.001

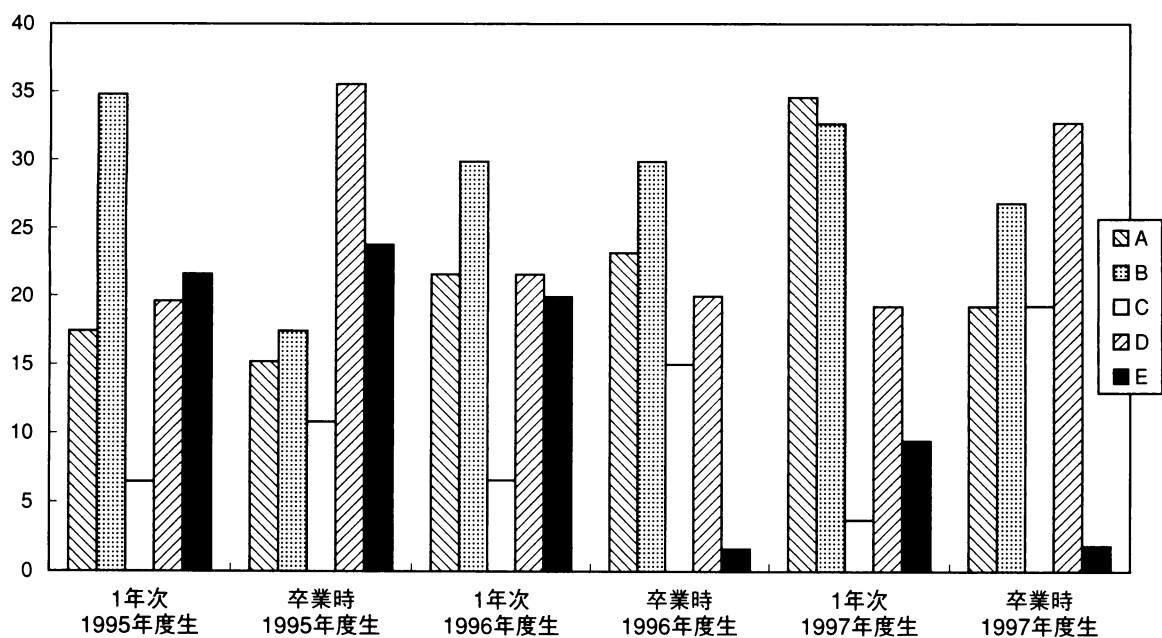


Figure 2 YG 5 類型 1 年次卒業時の比較

Table 4 1995年度～2000年度各年度のYG性格テスト12特性の平均値の比較

	1995年度生 M ± SD	1996年度生 M ± SD	1997年度生 M ± SD	1998年度生 M ± SD	1999年度生 M ± SD	2000年度生 M ± SD
D 抑うつ性	10.82 ± 5.59	11.36 ± 6.05	10.69 ± 5.16	10.11 ± 5.41	10.36 ± 5.46	12.17 ± 5.88
C 気分変化	10.33 ± 4.63	10.81 ± 4.81	10.99 ± 4.37	10.34 ± 5.07	9.95 ± 4.98	11.86 ± 5.26
I 劣等感	10.25 ± 6.01	11.05 ± 5.11	10.12 ± 4.47	9.11 ± 5.51	9.41 ± 4.88	10.82 ± 5.46
N 神経質	9.99 ± 5.50	10.12 ± 5.13	9.52 ± 4.66	8.93 ± 4.88	9.56 ± 5.02	10.46 ± 5.63
O 客観性	8.89 ± 4.07	9.91 ± 3.35	9.87 ± 3.57	9.31 ± 3.86	9.84 ± 4.28	10.83 ± 4.18
Co 非協調性	7.17 ± 4.18	7.87 ± 4.19	6.95 ± 3.54	7.07 ± 3.61	7.41 ± 3.52	8.11 ± 4.32
Ag 攻撃性	9.80 ± 3.97	10.39 ± 4.28	10.21 ± 4.36	10.31 ± 3.64	9.90 ± 3.78	10.20 ± 4.63
G 活動性	10.99 ± 5.41	10.74 ± 4.53	10.78 ± 3.38	11.46 ± 4.38	10.39 ± 4.02	10.69 ± 4.22
R のんき	11.92 ± 3.91	13.00 ± 4.87	12.67 ± 4.34	13.26 ± 4.82	12.89 ± 4.41	12.89 ± 5.03
T 内省性	9.98 ± 4.28	10.16 ± 4.48	9.54 ± 4.14	9.69 ± 4.62	10.18 ± 4.57	10.58 ± 4.47
A 支配性	10.28 ± 4.69	9.75 ± 5.22	10.51 ± 4.38	11.11 ± 5.29	10.54 ± 4.35	10.52 ± 4.68
S 社会的外向	13.12 ± 4.90	12.34 ± 5.31	13.61 ± 3.95	13.26 ± 5.26	13.33 ± 4.35	13.49 ± 4.64
n	76	77	67	61	61	65

* p < 0.05 ** p < 0.01

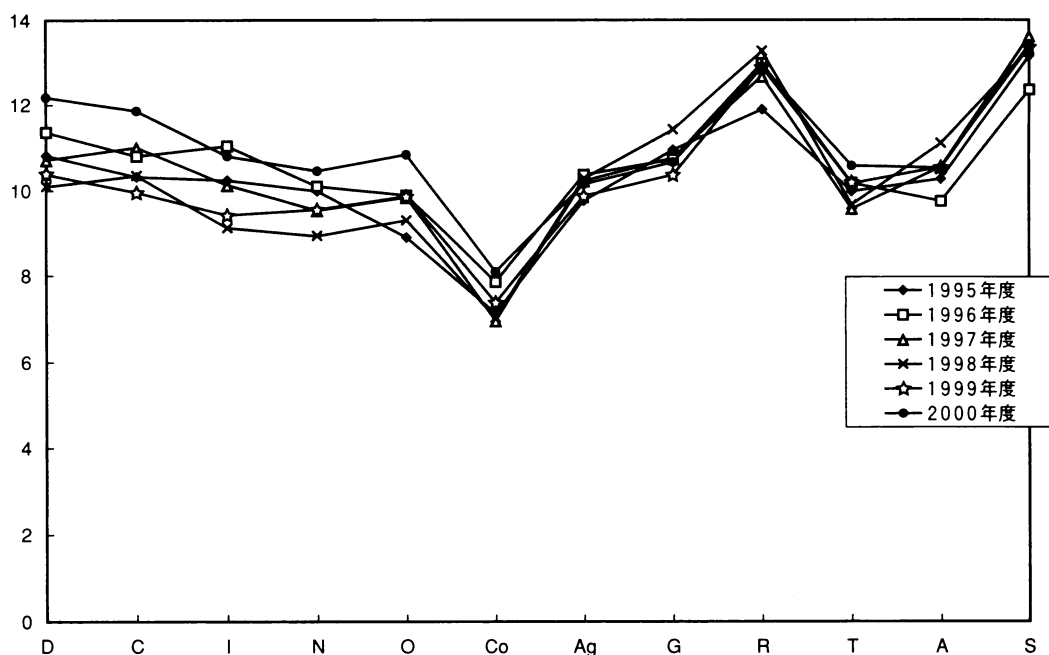


Figure 3 YG12特性平均 6 年間比較

5. 6 因子による比較

12特性を上位概念でまとめた6因子で比較した結果はTable 5 に示すとおりである。Table 5 から、情緒安定性に関しては1998年度生と2000年度生の間で5%水準で有意差が、また社会的適応性に関して1995年度生と2000年度生との間で5%水準で有意差が見られた。

6. YGプロフィール5 類型による比較

YGテストプロフィールの5 類型の学年別頻度分布はTable 6 及びFigure 4 に示すとおりである。Figure 4 から入学年度によって5 類型の分布にかなりばらつきが見られる。Table 6 から、6 年間の5 類型の度数分布は全体では有意水準1%レベルで分布に偏りがあることが示された。次に2 学年ずつ組み

Table 5 1995年度～2000年度各年度のYG性格テスト6 因子の平均値の比較

	1995年度生 M ± SD	1996年度生 M ± SD	1997年度生 M ± SD	1998年度生 M ± SD	1999年度生 M ± SD	2000年度生 M ± SD
情緒安定性	41.38 ± 18.04	43.34 ± 16.66	41.31 ± 14.42	38.51 ± 16.98	39.28 ± 16.75	45.31 ± 18.26
適 応 性	25.87 ± 8.94	28.17 ± 8.64	27.03 ± 7.75	26.69 ± 7.51	27.15 ± 8.58	29.14 ± 10.43
活 動 性	20.79 ± 6.65	21.13 ± 7.01	20.99 ± 6.45	21.77 ± 6.25	20.30 ± 5.39	20.89 ± 6.47
衝 動 性	22.91 ± 7.05	23.74 ± 7.88	23.45 ± 6.42	24.72 ± 7.21	23.28 ± 6.18	23.58 ± 7.70
内 省 性	21.82 ± 6.29	23.16 ± 7.24	22.21 ± 6.20	22.95 ± 7.39	23.07 ± 6.92	23.48 ± 7.97
主 導 性	23.39 ± 9.00	22.09 ± 9.90	24.12 ± 7.58	24.38 ± 10.13	23.87 ± 8.08	24.02 ± 8.52
n	76	77	67	61	61	65

* p < 0.05

Table 6 入学年度別YGテスト5類型の度数分布

%	A	B	C	D	E	χ^2 検定	人 数
1995年度	14.5	32.9	6.6	30.3	15.8		76
1996年度	20.8	31.2	7.8	22.1	18.2		77
1997年度	32.8	29.9	6.0	22.4	9.0		67
1998年度	19.7	24.6	3.3	42.6	9.8	*	61
1999年度	32.8	23.0	6.6	27.9	9.8	**	61
2000年度	12.3	44.6	13.8	18.5	10.8	** **	65

* $p < 0.05$ ** $p < 0.01$ $\chi^2 = 36.20$

df = 20

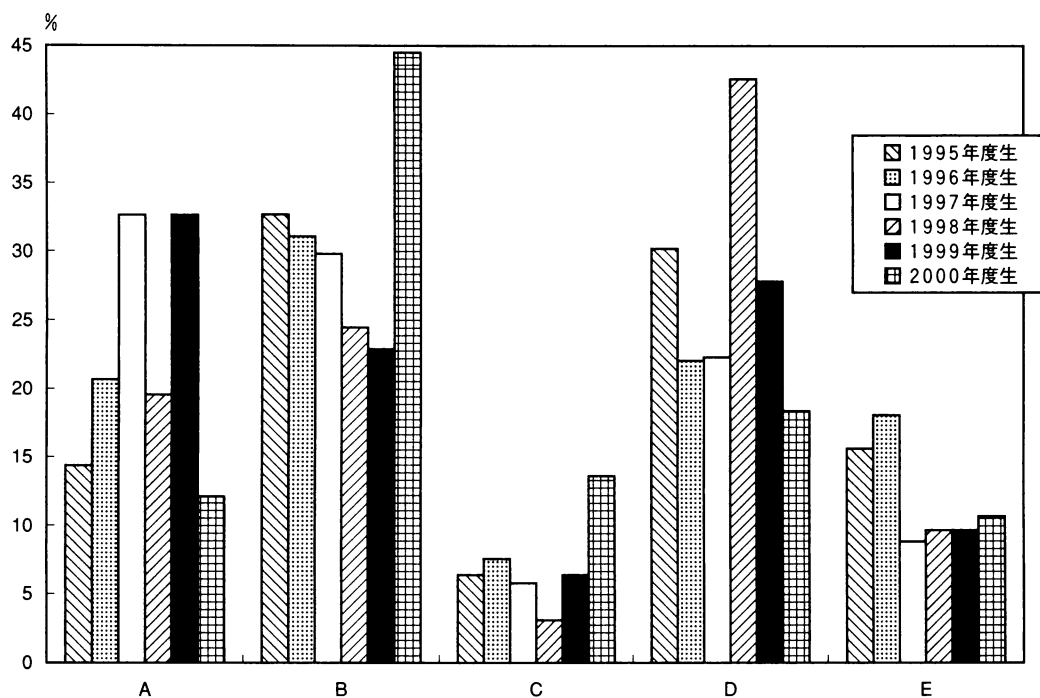
 $p < 0.01$ 

Figure 4 YG 5 類型 6 年間比較

合わせて χ^2 検定を行った結果、1997年度生と2000年度生の間で5%水準、1998年度生と2000年度生との間及び1999年度生と2000年度生の間1%水準で有意差があることが示された。

IV 考 察

前報に引き続き、1996年度生および1997年度生についてYGテストによって1年次と卒業時の集団特性を比較したが、1996年度生については卒業時には入学時よりも気分変化が大きくなった反面、協調性が高くなり、攻撃性や活動性、のんきさが低くなっていた。1997年度生についてみると、抑うつ性、気

分変化、劣等感、神経質が有意に低下し、客観性や協調性が増加している。それに伴い、攻撃性も低下している。より上位概念でまとめた6因子によると、1996年度生は卒業時の方が明らかに適応性が増し、活動性、衝動性が低下した結果、内省性が増加していた。1997年度生は情緒安定性、適応性が増加し、活動性が低下していた。これらは第4報に見られるとおり、1995年度の第一期生の結果と同様であり、とりわけ劣等感、神経質及び衝動性の低下、また協調性と情緒安定性の増加において、1997年度の第三期生と極めて一致した結果であった。

YGプロフィールの5類型でみると、1996年度生

は卒業時にはE型が半減した他はあまり差がなかったが、1997年度生は1年次と卒業時の間では分布に1%水準で有意差があり、A型、E型が低下し、逆にD型とC型が増加していた。1995年度生についても統計的に有意ではないが、B型が減少し、D型が増加しているような傾向が伺われる。

このように、YGテストのような一般的性格検査によっても、入学当初に比して、卒業時には情緒的に安定感が増して自信がつき、ただ衝動的に動くよりも全体としてより協調的、内省的になってくることが示された。このようなパーソナリティの変化や成長が何に起因するか、原因はきわめて多様であり、要因分析をするには至っていないが、3年間の学び、実習体験、友人関係等の社会生活の経験の中から、より安定し、社会的に適応した動きができるようになったと思われる。

次に、学年別の集団特性の違いを見るために、1995年度生から2000年度生までを1年次に実施したYGテストの12特性の平均値によって比較した。その結果、Figure 3にみられるように、YG12特性では各学年とも全体的に平行的に推移しているが、年度別の特徴をあげると、2000年度生は抑うつ性、気分変化、及び客観性の3特性に関して他の4つの学年よりも高くなっており、情緒的に不安定で、主観的傾向が伺われる。また1996年度生は劣等感の平均値が他の2学年より有意に高くなっていた。

次にYGテスト5種類の分布をまとめたTable 6から、2000年度生はB型が突出しており、他の3学年とは有意に分布に偏りがあることが示された。

また統計的に有意ではないが、1998年度生はD型

が他学年に比べて突出している。このことはFigure 3にみられるように、D、C、I、Nの情緒不安定性を示す特性の平均値が低く、活動性が高いことと一致しており、活発なグループであることが伺われる。逆に1996年度生は他学年よりもD型が少なく、E型が多い傾向が伺える。これは、YG12特性のうち劣等感が他学年よりも強い結果と一致しており、学年による集団特性の違いが反映されているように思われる。このように一般的性格検査であるYGテストによって学年集団の特性、持ち味の差が浮き彫りにされると思われる。

V おわりに

これまでYGテストを用いて看護学生の集団特性を継続的に調査してきたが、第一期の1995年度入学生から第六期の2000年度入学生までを比較すると、プロフィールの大きな傾向は類似しているものの、入学年度によって性格特性に有意差が見られ、入学年度による集団特性の違いが伺われる。

また1995年度生から1997年度生までを対象に入学時と卒業時のYGテストの結果を比較した所、卒業時には神経質や、劣等感、衝動性が低下し、反面協調性や情緒安定性が増すことが示された。これは短期大学における3年間の学び、実習体験、友人との交流、社会体験などによって各人が自己成長を遂げた事の反映であろう。彼らが卒業後、臨床の現場において、また更なる学びにおいて、ますます体験を深め、成長して行くことを願っている。

最後に調査に協力された学生諸氏に謝意を述べるものである。

参考文献

- 1) 加城貴美子, 大江 基, 他: 看護短期大学生の性格特性に関する基礎的研究, 川崎市立看護短期大学紀要, 第1巻, 第1号, 23-33, 1996.
- 2) 大江 基, 加城貴美子, 他: 看護短期大学生の性格特性に関する基礎的研究(2), 川崎市立看護短期大学紀要, 第2巻, 第1号, 69-78, 1997.
- 3) 加城貴美子, 大江 基, 他: 看護短期大学生の性格特性に関する基礎的研究(第3報), 川崎市立看護短期大学紀要, 第3巻, 第1号, 81-93, 1998.
- 4) 大江 基, 加城貴美子, 他: 看護短期大学生の性格特性に関する基礎的研究(第4報), 川崎市立看護短期大学紀要, 第4巻, 第1号, 69-74, 1999.
- 5) 大沢正子: 看護学生のパーソナリティの特徴, 神戸市立看護短期大学紀要, 創刊号, 131-140, 1982.
- 6) 中山久子, 飯田澄美子: 単科大学における看護学生の健康管理に関する研究, 聖路加看護大学紀要, 19, 25-35, 1993.
- 7) 八木俊夫: YGテストの実務手引き — 人事管理における性格検査の活用 —, 日本心理技術研究所, 1992.